エイリアン ステージ

コスミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エイリアン　ステージ

【Ｎコード】
Ｎ９３３１Ｙ

【作者名】
コスミ

【あらすじ】
文芸部と演劇部の女子高生コンビが、ぬらりと現れた宇宙人旅行客ども（無害無能の男、獰悪な少女、珍鳥）に運命を狂わされる。
二人は果たして、まんべんなく厄介な宇宙人どもを太陽系外へと追い払い、校史に残る演劇脚本を完成させることができるのか。
――やがて、舞台の幕は上がる。

1　テスト最終日

リミットを告げる教師の声が合図となって、静かだった一年β組の教室にペンを机に置くカタカタという音が一斉に広がった。箱の中に一握りの豆が蒔かれたようなその響きに加えて、紙の乾いた音や、生徒達の安堵とも絶望ともとれる溜め息が、どこからも聞こえる。

うなだれる者、伸びをする者、目の焦点が合っていない者。

そして、教室の一番後ろの席には、腕の枕でほっぺたをつぶしながらうめき声をもらす者もいた。

「いほー……」

と、すぐ背後の席からつぶれた声で名前を呼ばれた苡穂は、学力に関して一切の悩みが無い者に特有の落ち着いた動作で振り返った。

すると机にへばりついた友人、野森麻由美が、横たえた頭部から上目遣いの視線で同情を売ってくる。

「だめだー……、全然浮かばなかった。あまりにも浮かばなかったよーうう……」

口の動きに連動して、髪と頭全体が弱った動物のように揺れていた。

そんなうわ言を聞かされて苡穂は、ふっと微笑むと、友人の鼻を指先で押した。それは「ふぐっ」という音を生むスイッチだった。

「いいから早くよこしなさい」

と言いながらも、苡穂はもう野森の答案用紙を取り上げている。

「あー、さらば答案、短い間だった……。できればもう二度と会いたくないよ……」

友人の泣き言を受け流しつつ正面へ向き直り、裏にしてある自分の答案の上に徴収した野森の答案を、これまた裏返しにして重ねる。と、目が止まった。

「また……」

なんと野森の答案の裏には高校生にあるまじき、落書きがしてあった。それも大量に。
それらは絵にタイトルのような文字が添えてある形式で、まるで枠線の無いマンガのように配置されていた。

振り向き様にビスケット手裏剣を放つお菓子忍者、装備の総額は時給八百円の範囲内で。
イガグリとウニの漫才コンビ?トゲトゲトガリ?その下には、ハリネズミとハリモグラの超人気デュオ?ハリハリササリ?達。そこに群がるファン、刺さるファンと図が連なる。
やめてください、とゲソを固く結ばれたイカからの哀願。
水切りをする少年の投げた石が川を渡り、対岸の碁盤の上にバシッと音高く止まる。汗をたらし、参りましたと投了する棋士。
爆撃機から投下される大量のパイナップル。
カバの背に乗る目玉焼き。
鏡を見つつ、冷えピタに?合格?と書き込むビン底メガネの受験生。
「うわあー……」
苡穂は、そうしたどうしようもないイラスト群を見ることに数秒間を浪費した。苦笑まじりの吐息とともに、前の席の人に答案二枚を渡す。
野森の白くない答案は一番上のままで、必然、その列の全員の目に触れながら教卓へとリレーされていった。

「さあ、いほ帰ろ。放校アズスーンアズ帰ろ」
数分前が嘘のように野森は晴れ晴れとし、楽しげな調子で苡穂の支度を急かした。
「するやいなや過ぎるよ、ちょっとまって。……はい、行こう」
「いざいざ、風のように去りぬー」
「それ、風と共に、だよ」

「そだっけか。じゃ、風と共にナウシ――ふぐっ」
二人は徒歩のまま、通い慣れてきた下校路を一緒にたどり始める。
今日は一学期中間テストの最終日で、気合いの入った部活ならもう今頃再開しているのだが、彼女らの所属する部は、どちらも今日までしっかりお休みだった。よって優雅なる真昼の下校。
坂の多い住宅街を行く。青空を仰ぎながら、野森が目を細めた。
「いやーテスト終わっちゃったねー」
「それで、脚本のアイデアはどう？　良いの思いつきましたか？」
と苡穂は優しく意地悪なことを聞いた。しおれるように野森は肩を落とし、卑屈な笑みを見せる。
「いほさーん、わかってるでしょー。思いついてないですよねー。今日こそ起こす、奇跡。のスローガンを掲げていたんですけどねー」
「では野森さん、答案の裏にあんな大量の落書きをする時間と精神力は、いったいどこから湧くんでしょうか？」
マイクを差し出すような苡穂の手に、野森は噛みつこうとした。空振り。
「ぐあー、もう！　テスト中はアイデア神の恩寵にあずかれるはずなのになぁ」
「不可解なイラストネタなら、たくさん獲得してたけどね」
「ほんとだよ……この三日間あんなのばっかり。本マグロを狙ってるのにずっとツナ缶しか釣れない漁師の気分だよ……。やっぱあれかな、テストをやらなくてはならない状況下では他の事で頭が働いちゃう作戦で、その作戦をやらなきゃいけない状況下にしてしまうとまたさらに他の事へいってしまう、ということかな」
苡穂は後半を聞き流し、数日前にも述べた意見を持ち出した。
「結局、テストに集中するべきだったってことだね」
「それは違います。不可能です、そんなものは」
野森はきっぱりと言い切り、拳を振るう。
「やっぱり集中力ですよ！　まだまだ今日は長い、これから十二時間以内に思いついてみせる！　トゥエンティーフォーハーフ！」

「なんでそんなに今日にこだわるの？」
と苡穂が何気なく聞くと、野森は一度視線を外し、数歩の間の後に答えた。
「えっとね、誕生日だから、とか」
「……ええ！　ほんとに？」
驚いて立ち止まった苡穂を見て、野森は「うん」と頷きながらも口を引き結び、照れ笑いを隠している様子だった。苡穂は、まばたきを増やしていたが、返事を受けてすぐに笑顔になった。
「おめでとう！　十六歳！　お祝いしなくちゃね……もう、言ってくれてれば準備したのに」
野森は頭をかきながら困り顔である。
「そんな、大層なことしなくていいって……」
「だめだよ、せっかくなんだから。でもどうしよう、このあと時間ある？」
「あるけど……でもいいよ、ほんと。ほどほどで」
などと遠慮がちな野森を無視しつつ、苡穂のお祝いムードは加速していく。
「今日テストの日で幸いだったね、まだお昼だもん、どこか行こうか？　あ、でもどこも結構遠いし……」
海と山に挟まれたこのあたりでは娯楽施設もコンビニも貴重で、いずれもあいにく通学路から寄り道するには遠い場所にあった。駅もまた遠い。
「……わかった。それなら、私の家に来て！」
と一際明るい声を上げた苡穂は、自分の思いつきに満足しているらしい。野森は、そうしたまばゆい様子とやたらに輝く瞳を見せられ、到底反対も遠慮もできなかった。
「えーと、はい、謹んでお邪魔させていただきます……」

2　合歓木苡穂の大邸宅

「まさか、え、ほんとに……？」
野森は落ち着きなく視線を泳がせながら、近所で知らぬ者のない？御殿？の門を前にしていた。見事な枝振りの松が、塀の向こうから頭を覗かせている。
苡穂は、インターホンを鳴らしながら軽く振り向いた。
「そうだよ。この春から住ませてもらってるの。前から、長い休みの時はよく泊まりに来ててね、それで？？あ、苡穂です、ただいま帰りました」
インターホンから『お帰りなさいませ』との仰々しい返事がかすかに聞こえ、野森はさらに萎縮した。緊張にのまれないよう、とにかく手近なものを見て言ってみる。
「あ、表札、合歓木（ねむのき）じゃないんだね」
もしかしてそれは聞いてはいけないことだったか、と不安になるよりも早く、苡穂の答えが返ってきた。
「そう。山井は、ハウスキーパーの名字」
「え、ハウスキーパーって……。じゃあ、何でその、合歓木って表札じゃないの？」
「それは、だって防犯上？？」
と、ガタゴトと鍵か閂の音が聞こえ、まもなく大きな木製の扉が開いた。いちいち味わい深い音がする。
「お待たせ致しました」
姿を現したのは、いかにも品の良いおばさんだった。なんとなく執事っぽいと野森は思った。
「初めまして、野森麻由美さんでいらっしゃいますね。どうぞ」
ややそっけない言い回しを補うかのように、おばさんは友好的な笑みを見せている。手で「こちらへ」と示す動きも柔らかい。
苡穂が一歩退いて、野森を先に促しつつ「山井朋子さんだよ」と

小声で教えた。

「わー……すごい。映画やテレビの世界だよ……」

門をくぐり、おずおずと歩きながら野森は修学旅行で訪れた京都を思い出していた。

パターゴルフをしたら楽しそうな（そして怒られそうな）、広大で良く手入れされた日本庭園。そして、冬になったら赤穂浪士が討ち入りにでもやって来そうな、立派で厳かなお屋敷。ちょうど四十七人くらいならもてなせそうな大きさだ。

「そうだ。車でどこか連れて行ってもらう手があるね」

と、前を歩く苡穂が言い出した。

その手が示す方向には、建て増しらしいガレージがあり、その中に黒光りする高級車が潜んでいた。さらに、遠くの方には土蔵の白い壁と特徴的な屋根が見えて、いよいよ野森の背が涼しくなる。鑑定団もやって来そうだと思った。

山井朋子が、苡穂だけに向けて静かに言った。

「先ほどご連絡をお受けした時から、多少は準備しましたので……、いずれにせよ、まずはお上がりいただいてお茶でも……」

「そっか、うん、そうだね。そうします」

苡穂はそこで野森へ視線を送り、「まず家で休んでもらって、その後、どこか行きたいところがあれば」とやんわり訊ねた。

「いや、そんな、なんというか、できれば最もお気軽で人手をわずらわせないプランでお願いします……」

野森はどちらかと言えば本当はもう家に帰りたかった。ジャージ上下でクラシックコンサートに臨むような気恥ずかしさがあった。

そんな心情を察したらしく、苡穂は楽しげな笑みを浮かべる。

「わかった。じゃあ、うちでゆっくりしていって。そしていっそもう泊まるか暮らして」

「な……、またまたぁ」

野森は精一杯の作り笑いで、なんとかそれだけ言った。

約一時間後。
「ふぅー、美味しかったぁ……。限りなく美味でしたー」
野森は満ち足りてふやけきった表情を浮かべ、緩慢な動作でお茶を飲んでいた。
お茶、昼食、ケーキ、お茶と怒濤のようなおもてなし波状攻撃を受けてさらに緊張が増すかと思われたが、至高の食味快楽を立て続けに味わううちに、だんだんともう色々なことが気にならなくなっていた。
向かいに姿勢良く座る苡穂が、お茶を置きながらそんな様子に笑みをこぼす。
「ふふ、お口に合って良ござんした」
「くふふふ……さすが、上手だね朋子さんのマネ。酷似酷似」
屋敷の奥、庭を望むのに最も良い場所に位置する応接間。歴史的なまでに純和風な空間である。床の間には、掛け軸と何かの枝を生けた花器が当然のごとく揃っている。がやはり、自然と目が向かうのは、午後の強い光で照り映える庭の景色だった。
「しかし、絶景ですなぁー。この誕生日は、一生ものの思い出になりそうだよ」
野森に合わせて庭を見ていた苡穂は、その言葉で思わず友人の横顔に引きつけられた。
「もう、一生かけなきゃ返済できないね、この借りは」
とおどけて言った野森の笑顔に、苡穂は返すべき言葉を探すのに時間がかかった。
「……少なくとも、利息はいいからね。なんて」
「ええ、ほんとに？」
そこでほどけるように、どちらからともなく少し笑い合った。そのあと、今はより和やかな空気に満ちた和室から、また二人して庭を眺める。薄雲ひとつない快晴、光が溢れている。

と、野森が、庭の一方へと腕を伸ばして言った。
「気になってたんだけどさ、庭のあの、甘食みたいな形の、山かな？　あれってなんていうか、何なの？」
「あー、あれね。すごい昔からあるみたいなんだけど、意味とかは良くわかんない。ちっちゃい頃、よく登ったりして遊んだなぁ。見つかると怒られたけど」
「そりゃ危ないよー、あれって地味に標高二メートルくらいあるでしょ」
「うん、結構登りがいがあるよ。近くで見ると大きく感じるし」
「ここから見てもすごい存在感だもん。なんか、モダンなフォルムというか」
「うぅん、そうだね。妙にきちっとした形だからすごく浮いてるよね、改めて思うと」
トントン、と不意にノックのような音がして、「はい」と苡穂が素早く反応した。
ふすまが開き、山井朋子がお茶の替えをお持ちしましたと言う。そして、二人のお茶が器ごと新しいものと取り替えられた。
去ろうとする山井朋子へ、ふと苡穂が声をかける。
「そうだ、ねえ朋子さん」
「はい、何か」
「庭のあの小さい山って、何か由縁があったりする？」
野森は、また少し緊張しながらそのやり取りを見守っていた。
苡穂の疑問を受けて、山井朋子の温和な表情に、ほんのわずかだが何らかの張力が働いたようだ。
「ええ、ございますとも」
声は明るく、今までにないくっきりとした響きがあった。記憶を探るように一度視線を外し、息を吸って語りだす。
「なんでも二百年ちかく前に、突如、一夜にして現れたとか。詳しくは、その当時のものは少ないですが、後年に撮った写真などの記録の品がいくらか残っております。苡穂さんは、ご覧になったこと

がおありかと存じますが……」
「えっ。そういえば、なんか見たような……でも、だいぶ前の話じゃない？　ほとんど覚えてないよ」
待ち構えていたように、山井朋子はその言葉を受けて一際優しい笑みを浮かべた。
「無理もありません、あれは十年以上も前のことになりましょうか。苡穂さんが初めて七五三をなさった頃のことでしたから……。あ、よろしければ、今ひとわたり持って参りますので……」
「うん、見たい見たい。じゃあちょっとお願いします」
「わかりました。では、しばしお時間を……」
と頭を下げながら言い、山井朋子は静かに退室した。
野森は、何だか余計な仕事をさせてしまったように思えて、ちょっと気が重くなった。
それを紛らわそうと、軽口をたたく。
「ね、これで、朋子さん七五三の写真だけをひとわたり持って来たりして。しかも確信犯で」
それを聞いて苡穂は呆れたような、純粋ではない笑顔で言った。
「そんなボケをやってのけてくるようなら、私は複数の野森に囲まれて生活してることになっちゃうね」
「えー？　そんな？ボケイコールわたし？みたいに言わないでよー」
野森は、明らかにまんざらでもなかった。

3　現れる色々

「えっ……」
「うわ……」
二人は目を大きく見開いて固まった。苡穂はやや眉をひそめ、野森は興味をひかれた様子と、それぞれ驚きの質は異なっている。
山井朋子が持って来たのは、四リットルほどの容積がありつつも軽そうな、つづらだった。ずいぶん歳月を重ねたであろう、深い焦げ茶色。
そして、その彼女の後ろから、身長五十センチ程の人形が見るも滑らかな二足歩行を披露しながら入室してきた。その際、ちゃんと敷居はまたいでいた。
もちろん二人が驚いた原因は、その人形だった。
真っ白い顔に、おかっぱ頭。虚ろな瞳の光沢が、無表情を際立たせている。
金糸を編み込んだきらびやかな袴をお召しになっていて、上半身は何故か、白いブラウスにループタイといういでたち。
「こちらの中に、古くは明治のはじめ頃からのお写真や、書類があらかた揃っております。では……」
と、つづらを置くや早くも去ろうとする山井朋子を、苡穂が慌てて引き止めた。
「ちょっとまって、何、え？　うわっ、すごい奇麗な正座！　いや、この人形、何これ？」
「すごーい。どこ製だろう、ソニー……いや、ホンダかな。アシモの妹分とか」
「そんな似てない兄妹やだよ、怖い！　これ単体ですでに怖いのに」
山井朋子は意外そうな表情で説明する。
「こちらも覚えていらっしゃいませんでしたか。これは、？みまもり童子？といいまして、このように、あの小山に関する品々を必ず

ひとまとめにし、その行くところにぴたりとついて離れない、そんなからくりでございます。？その当時のもの？とはこれのことでして、なんでも、小山と共に現れたそうです。仰る通り、少々不気味ですね」
「だいぶ不気味だよ。というか、あの山よりもこっちの方が遥かに変な代物じゃない。なんで私、こんな印象的なものを覚えてないのかなぁ……」
「動いているところをご覧になっていなかったからかも知れませんね。つづらの中の品を遠くに持ち出さない限りは、こうして大人しく座って動きませんので」
「ほんとに、微動だにしないねぇ」
怖がるどころか興味津々な野森につられたか、苡穂も訊ねてみた。
「うーん……朋子さん、この謎人形に関する言われとか資料はないの？　がぜんこっちの方が気になってきたよ」
苡穂の問いかけに、山井朋子は渋い反応だった。
「それが……、資料は一切無いのです。何故か、さきほど申したことぐらいしか伝わっておりませんで……」
「えー……。ますます不気味な代物ね。わかった。それならまず、つづらの中をあたってみます。もしかしたら何か新しい発見があるかも……素手で大丈夫かな？」
「差し支えないかと。一応、手袋をお持ちしましょうか？」
早くもためらいなくふたを持ち上げていた苡穂は、中の保存状態を見てすぐに返事した。
「あ、平気、手袋は無くていいです」
「わかりました。では、何かありましたら……」
お馴染みとなりつつある山井朋子の完璧な退室っぷりを見届け、野森もつづらの中を覗き込んでみた。
革の表紙のアルバムが数冊、古そうな茶封筒、乾燥剤の小袋が目についた。やはり量は少ないが、状態はどれも良好だった。

「なんだか、記念写真ばっかりだよ」
「んー……。資料の方も、人形に触れてる部分は見あたらないなぁ。これも……、うん、たぶん山の話だ。庭で茶会を開いたとき、燗に使ったお湯をかけたら色が変わった気がするといつも良く呑む人が言い出した、とかなんとか」
写真は野森、文書は苡穂、と手分けして全てに目を通した結果、山井朋子の言った通り人形に関する情報は皆無だった。
二人は息をつきながら顔を見合わせ、やがて人形へと視線をすべらせていく。
苡穂が、あまり気のすすまなそうな声で言った。
「じゃあ仕方ない、この方に直接訊ねてみようか」
「ま、まさか脱がせるおつもりですか、お代官さま」
などと野森はあらぬことを口走りながら、両手を顔にあてがった。
「たわけ者、そんなことは……えっと、それは……最終手段だよ」
「嗚呼っ、そんな、お戯れをー」
なよなよと身をくねらせだした野森を無視しつつ、苡穂は改めて人形をじっくり観察し始めた。
手で触れることはせず、座った姿勢のまま上体を前傾させ、顔を近づけて良く見る。やがて、両手を畳について身体を浮かせ、少しずつ回り込むように何度か移動した。
「苡穂さん、座り方がだんだん正座っぽくなってるよ。ふふふ……人形につられちゃって、微笑ましい」
「そう言う野森に至っては完全な正座ですね。しかも何だかちょっと似合わない」
野森は背筋を伸ばすように胸を張って、片手の甲を腰骨にあてた。
「似合わないのは、まあねー、脚の長さがね、あれだから。いわゆるグローバルな水準ってやつだから」
「単純に？脚が長い？って言いなさい。それに、野森の場合は身長ごと長いよ」

「な、そんなことないよ。スリムのことをロングと取り違えてるんだきっと絶対そう」
「いいや、間違えようもなくロングです」
「何を言いますか、ご覧の通りショートヘアだよ、わたしは。ロングなのは苡穂さん！　あなただ！」
「そのごまかしは却下です。残念ながら私、身体測定で聞いたのを覚えてるんだから。その高さ、実に百六十五．四センチでしょ」
「ああ、そんなあっさり言わないで……。くうーいまいましい、あと一センチ低ければ、一の位にまで四捨五入システムを存分に活用できたのになぁ……」
　惜しくも平均身長に届いていない苡穂としてはその言いぐさは聞き捨てならず、軽めの口撃許可を下ろすことにした。
「そうだね、十の位に使えば、二メートルだね。あの山の標高とお揃いだね」
　野森の精神に鈍いダメージが与えられた。横へしだれるようにへたりこみ、口元に袖を掴んだ手を寄せる。
「嗚呼々々っ、いたいけな乙女の身の丈を山の高さと揃えるだなんて……殺生なお方……。ひどいですわ、お代官さまー」
「よーし、その有り余る身長から五センチ分けてくれたら許すぞ」
「そうしたいのは山々ですが……、それでちょうど二人がお揃いくらいになりますし」
「あ、そうか。じゃあ七センチにする」
「ちょっと、なんでよー！　ここは揃いましょうよー」
　野森は前に両手をついて身を乗り出した。
『……』
　そんな二人の戯れを頭上に聞きながら、人形は、じっと動かないままだった。

――そして、彼らは、ついに動き出す。

「ははは……、もう、お代官さまったらー、殿中でございますぞ……って、うわっ、え！？」
まず、先に野森がその異変に気づいた。
完全な二度見で、庭の小山の頂上部分が焼きハマグリのようにぱかっと開く瞬間を目撃した。
苡穂も、笑みを瞬時に消してすぐにその視線の先を追い、同じように驚愕する。
「……あ。え、何……何で？　あれって、開くの？」
「え？　苡穂ちゃん、なんで、知らないの？　わたしが聞きたかったのに」
苡穂は何回かまばたきして、細い息を吐いた。
「知らない、知らない。何だろう……、地下室、かな？」
「ああ、そうだよ、それだ、きっと。核シェルターとかでしょ」
とひとり頷いて納得しかけていた野森は、
「あ！　まって……何か、な……」
苡穂のそのただならぬ声を聞き、再び小山へ、恐る恐る目を向けてみる。

「……うへ、まぶしっ」
小山の中から突き出した頭部が、そんな声を発した。
青い、ミントアイス色の髪。細い手が、目元をかばうように現れた。
そして、それは小山の断面の淵を掴み、頭部から下の身体がすっと生えていく。
身軽そうに腕を伸ばしきり、腰をかけた。
どうやら男性である。ボタンが縦一列に並ぶ、伝統的な型のパジャマ姿だった。今引き上げられた下半身もまた、パジャマ。足には

でかいスリッパ。
「はい……手。気をつけて、まぶしいから」
とその男は部屋の二人には聞こえない大きさの声で、小山の内部に向けて言った。手を差し伸べている。
「……寒っ」
中から、少女のものらしい、そして不機嫌な声がした。
続いて、紛れも無い少女の頭が、ひょこっと出てくる。が、その表情は険しい。
やや量が多く長い髪は、日差しを受けてアッサムティーのような赤茶色に輝くが、影の部分はほとんど黒だった。
「まだ寒いじゃん。これで春かよ……マジで？　温室効果ガス足んないだろ、実際。ほんっと、ガス欠惑星だな。このガス貧が……」
などと口の中で悪態をつきまくりながら、少女は男の差し出す手を完全に無視して自力で上りきった。
ドレッシーな丈の長い白シャツを着て、下は子供らしいハーフパンツとキャンバス地のスニーカーという服装。
パジャマ男は、壊滅的に不味い手料理を振る舞われたような表情を浮かべ、差し出していた手を開閉しながらぎこちなく引っ込めた。遠慮がちに、少女へと声をかける。
「いや、温室効果ガスも結構頑張ってるよ。それに今日は暖かいと思うけど……」
少女は数秒だけ空を見上げ、今自分が出て来たばかりの穴の奥へと両手を差し入れ始めていた。
「黙れクソバカ」
むしろ冷静な口調でそれだけ言い、茶色い、ずんぐりむっくりとしたものを穴から取り出す。
それは、鳥だった。
バスケットボール大の胴体に、長い脚が二本と、カーブした細いくちばし。
少女の手を離れて山肌に降り立つと、身体を膨らませつつ、ぶる

っと振るえる。
「キィーウィッ」

「……あ、鳴いた」
部屋では、二人が身動きひとつせず庭の異常な光景を見続けていた。
思わずつぶやいた野森が、ちらと苡穂の横顔に目をやるが、人形のように無反応だった。

4　異文化コミュニケーション

「あっ、おい」
山の頂上部分が元に戻り始めるのに気づき、パジャマ男が内部へ向けて声をかける。
「本当に今回は残るのか？　せっかくなのに」
『いいよ。気は変わらないし、後悔もしないだろう』
そんな音声が、山からにじみ出た。男は、軽く眉を上げる。
「つれないなぁ、協調性をもっと意識したほうがいいんじゃない？」
山が反論した。
『自分はここで君らをサポートする、それが協調足り得ないだろうか。自分の意志も、四半分くらいは尊重してくれると嬉しい。前にもいったが、炭素型生物の身体を被るのはどうも好かないんだ。アレルギーかもしれない。しかも、胎生ほ乳類タイプだろう？　前回の衛星の連中と同じじゃないか』
開いていた山はついに元通りとなった。男は肩をすくめて、あまり気にしていない意を表す。
「わかったよ。最後の主張として、前の連中は四つ足だったけどね……。まあ事実、そこでサポートしてくれるのはとてもありがたい。実は、君が出て来るなら僕が残ろうと思ってたくらいさ。とにかく、会話の練習に付き合ってくれて感謝するよ、早速のナイスサポートだ」
「何だよ、お前も残れよ」
少女は鳥と一緒に、とっくに山を降りていた。肩越しに見上げて毒舌をふるう。
「しかも練習なんか要らないだろ。お前自体が要らないんだから」
男は切ないリアクションもそこそこに、数歩で山から降りた。そして、二人と一羽で歩き出す――
「だって、そそうをしたくないじゃない、あのお二人にさ」

――苡穂と野森のいる部屋へ向かって。一直線に。
「だからー、お前自体が混じりっけなしの粗相なんだよ。ねえ、小岩井」
「……クィー」
「そりゃ誰だって君には負けるよ。――どうもー、こんにちわー！」

あまりにも気楽な格好で気楽な挨拶をしてきた水色髪の男を見て、苡穂と野森は、全身に緊張を走らせた。
「知り合い？　親戚とか？」
「そんなわけない。野森の知り合いじゃないの？」
と口早に確かめ合いつつ、迫り来る見知らぬ者たちを、視界の端で捉え続ける二人。直視はできなかった。
そうこうしている内に、話し声さえ届く距離になってしまった。
「キュッ、キュイー」
「そう？　じゃあ、最初の食事が悪かったら、地殻からいじくろうかな」
「ちょっと、外交的に問題のある冗談はナシでね。――あ、こんにちわー」
男の礼に倣って、少女と鳥が黙って頭を下げた。
怯えた様子の苡穂に袖をがっちり掴まれている野森が、図らずも盾になった。ありったけの勇気と人なつっこさを総動員して、会釈。
「こん、にちは……」
すると少女が、祈るように両手を抱き合わせた。目を潤ませている。
「あの、上がってもいいでしょうかぁ」
野森は胸に圧迫を覚え、苡穂を見る。彼女は口を小さく動かし、やがてなんとか発声機能を取り戻した。
「……え、ええ、そこでは、そうですね。どうぞ、玄関はあちら……」

「あ、おかまいなく。ここで脱いじゃいますから」
と男が早くも正座のような姿勢で侵入を果たしている。一度背を向けて、脱いだスリッパをきちんと揃えた。少女も、ためらいのない動きで部屋にまで踏み込んでいる。鳥は、男のスリッパで足の裏を拭いている。
「ペット可ですか？」
男が苡穂に訊ねる。と、少女が髪を広げて振り向いた。
「小岩井は家族だよっ、ペットじゃないもん！」
「……こ、小岩井？」
野森は、だいぶ接近してきている少女の横顔を見ていた。目が合う。
「そうだよ。小岩井は小岩井だよ、飛べない鳥なんだよ」
男がそこへ発言。
「いやいや、僕ら中身はみんな宇宙生命だから――」
「あ、バカ！　クッソバカ！」
少女が突然、それまでの舌足らずな喋り方を覆す、ビビットな発声をする。
「なんでそんなすぐにバラすんだよ！」
男は、二つのお茶が載る広い卓に向かって座りながら弁解した。
「だって、もう飽きたんだよ、そういうの」
少女は脱力して、すとんと腰を下ろした。
「はあ？　なんだよもう、もったいないなー……」
意気消沈といった様子で、卓上に組んだ腕を投げ出し、仏頂面をのせる。その姿が卓のなめらかな表面に映り、逆さ富士の様相。
苡穂と野森は、顔を見合わせて互いの困惑を共有していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9331y/

エイリアン ステージ

2011年12月11日21時53分発行